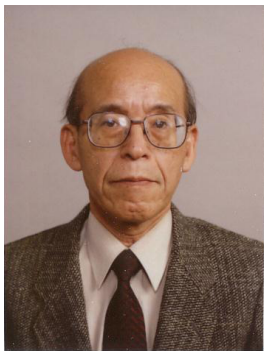
巻　頭　言

頑張れ一期生！



有　田　五　次　郎
（九州産業大学・情報科学部教授）

情報科学部が創設されて 3 年を経過した。一部の諸君は飛び級で博士前期課程に進学し、大部分の一期生が 4 年生になった。そして、いわゆる「就活」と「卒研」という新しい試練に直面している。一期生は開拓者である。参考にする前例もなく、規範にすべき伝統もない。すべてを自分たちが作り出していく歴史の創造者である。

一期生諸君と情報科学部はいままさに「正念場」にさしかかっている。「就活」の結果は、君たちの社会人としての人生を左右するし、情報科学部の今後の就職事情に大きな影響を与える。

言うまでもなく、就職することだけが重要なのではない。入社した後に、良い会社に入ったと自分が満足し、良い人に来てもらえたと会社から評価されなければ意味がない。そのためには、卒業した時に「情報科学部卒業生としての実力」を持っていなければならない。この意味で「卒研」にどれだけ真剣に取り組むかが大変重要である。

これを書きながらいま、1962 年の夏を思い出している。前にも書いたと思うが私は九大電子工学科の「一期生」である。43 年前、私も 4 年生になって卒業研究に着手した。どういう理由で選んだか今では覚えていないが、テーマは「等価回路を用いたトランジスタのスイッチング特性の解析」であった。トランジスタのスイッチング回路を作り、抵抗やコンデンサーなどの回路パラメータを変化させ、オシロスコープでスイッチング時間を測定して、教授が考案した等価回路による理論解析と合うかどうかを実験・検証するものである。

渡されたものは、分厚い英語の本と、15 ページぐらいのこれも英語の参考論文、それと等価回路である。先輩が何かやっているというのも見ていないし、そもそも「卒業論文」なるものがどんなものであるかも分からない。これで一体何をしたらいいのだ？というのが最初の感想だったように思う。この年の夏休みは、ずっとやってきた部活の「夏山合宿」も行かず大学に通い、とりあえず英語の本はパスして、講座の助教授の先生に教えてもらいながら英語の論文を訳して、何をするのかを理解することに費やした。以後の悪戦苦闘は省略するとして、無事実験まで終わり、結論は「等価回路が簡略化されすぎており、実験と理論値が合わない」というものであった。

この卒業研究で多くのことを学び、多くのものを得た。第一は、自分で何かをやり遂げたという満足感と自信である。これは以後の人生において困難に出会ったとき、方法を考えて頑張れば何とかなる、という前向き思考の元になった。第二は、大学では先生と「仲良く」なり、先生を「利用」することが大変重要だということである。卒研の指導はもとより、晩飯もおごってもらったし、酒飲みにも連れて行ってもらった。私は大学院では「電子回路」から「計算機」に専門を変えたが、このアドバイスも卒研を見てもらった先生からいただいた。第三は、この方法ではだめだという結論も立派な成果であるということである。だめなことが分かれば別の方法を考えればよい。やってみなければこれは分からない。

長くなったがもう一つだけ強調しておきたいことがある。卒研に限らず大学で勉強した内容は何であれ、すぐに役立つことがないとしてもどこかで必ず役に立つ。また、情報に関連した研究はやってみればどの分野も面白い。自分の希望した分野でない、などと言わずにしっかり「卒研」に取り組んでほしい。先生たちが期待をし、後輩たちが注目している。　就活に、卒研に　頑張れ一期生！